# 弔辞

## ―故竹田聽洲教授―

水野恭一郎

謹んで竹田聽洲先生の御霊前に追悼の辞を申し上げます。私達はもはや先生のあの学問へのひたむきな厳しい情熱とまた深い人間愛に溢れたお姿に、親しく接することが出来なくなりました。私が先生との交わりを持つようになりましたのは、私が京都大学史学科を卒業した頃からで、当時先生は史学科国史専攻二回生の学生でしたが、既にその頃から先生は国史専攻の学生たちの中でも一際目をひく存在でした。昭和十五年御卒業後、大学院へ進まれ、日本仏教文化史の研究というテーマで、西田直二郎・柴田實両先生の指導をうけられることになりましたが、大学院在学一年で昭和十六年三月現役兵として入隊され、中国大陸へ渡って軍務に従事されました。

終戦後二十一年七月復員帰国され、その直後浄土宗総本山知恩院の什宝係を嘱託されると共に、望月信亨博士主宰の仏教文化研究所研究生として再び学究の生活に入られました。同時にこの年十二月には、現亀岡市曽我部の無量寺の住職として浄土宗僧侶としての職務にも従事されることになりました。また二十五年四月からは佛教大学の非常勤講師を委嘱され、爾来佛教大学との関係は今年に至るまで絶えることなく続きました。その後二十九年から先生は同志社大学に専任の教員として奉職されることとなり、五十三年三月に至るまで凡そ二十五年の間、同志社大学において研究と学生の指導に専心されました。その間に先生の御研究は大いに進み、日本民俗学、日本宗教社会史に関する数多くの著書論文を公けにされ、仏教民俗の研究に関しては正に学界をリードする地位を確立されました。

そして昭和四十六年五月には、「常民仏教と祖先信仰」と題する研究論文によって、京都大学から文学博士の学位を受

けられ、この論文はやがて「民俗仏教と祖先信仰」と改題された大著として刊行され、学界に与えた功績は極めて大なるものがありました。その間、また浄土宗門の僧侶としては二十九年から一時大阪の一心寺住職を兼務されたのち、三十六年四月現在の寿仙院住職となり、僧階もまた四十五年三月には僧正に叙せられました。先生が佛教大学へ専任の教授として奉職したいという意志を洩らされ始めたのは五十二年の春頃からで、私達も先生がそのような気持になられたことを喜び、同志社大学の御了解を得て五十三年四月から佛教大学文学部史学科の教授にお迎えしたのでしたが、その頃から先生はややお身体の不調を訴えられ、同年春一時御入院ののちは退院後も非常に体調に留意され、ひたすら摂生療養につとめておられました。

しかるに昨年の暮、再度入院を余儀なくされるようになり、爾来先生の再起の日の早からんことを願う私達の期待と祈りも空しく、病状は次第に悪化の方向に進み、遂に九月六日早朝帰らざる人となってしまわれました。誠に痛恨の極みであります。今にして思えば、先生がその晩年に佛教大学へ専任として奉職することを強く望まれたことは、浄土宗門の学僧として最後の報恩の場を宗門の学林である佛教大学でという宗祖のお導きが暗々のうちにあったような思いがしてなりません。先生は生来は頑健で、またその性格・風貌・言辞も正に豪快の感を抱かせる方でしたが、実はその反面極めて慎重且つ几帳面で緻密な頭脳をお持ちでした。そのことは先生の精緻な御研究の上にもよくあらわれております。

殊に先生の学問への真摯な情熱は計り難い程のものがあり、その情熱は御臨終の時にまで、なお強く持ち続けておられました。まだまだ今後成すべき多くのことを心中に懐いて居られたことでしょう。惜しまれてなりません。しかしこの先生の学問への情熱と残された業績は、先生の教えを受けた多くの学徒たちによって、この後も永くうけつがれ、生きつづけてゆくと信じます。

今、先生の御霊前に立って在りし日の御姿、お話しのあれこれを思い起し、万感胸に迫る思い切なるものがあります。今や幽明界を異にいたしましたが、どうかこの後も西方浄土から私達を見守りお導き下さい。哀惜の思いは尽きませんが、先生の御冥福を衷心よりお祈り申し上げて、お別れの辞といたします。先生どうか安らかにお眠り下さい。　　合掌

昭和五十五年九月八日　於寿仙院

（みずの　きょういちろう　文学部教授）

♣　◇　♣